



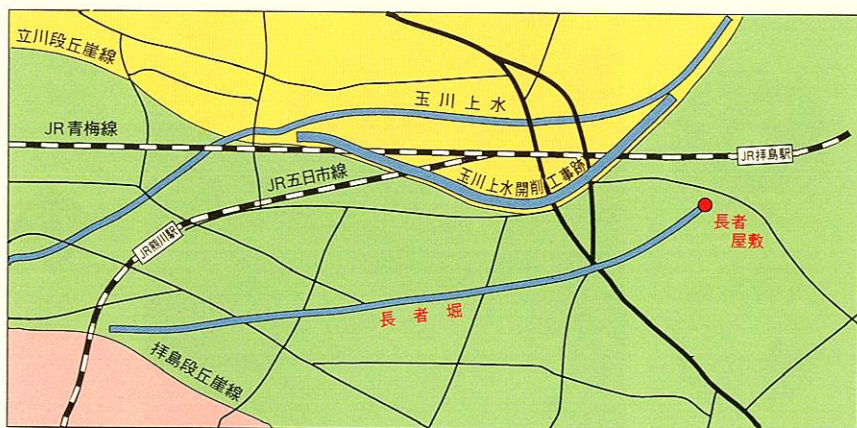


鎌倉街道 鎌倉へ通じる古道の総称。特定の路線ではないが、有名なのは信濃に通じる上ノ道、房総に向かう下ノ道、そして中ノ道である。交通の大動脈であった。(『週刊朝日百科 日本歴史』参考)

域にあったと思われる)の開発を行ったことが推測される。

三代執権(北条時義)の子泰時は、さらに武蔵野開発を進めた。一二四一年(仁治二)十月二十二日に計画された多摩川流域の水田開発は、多摩川に堰を築き堀を掘り、灌漑施設をつくって水を送り、水田開発を行うという大規模なものであった。泰時がこのように武蔵野開発にこだわったのは、当時、天候不順で全国的な飢饉がつづいたため、新田開発を奨励して生産力を高め、食糧確保に万全を期したいと考えたからであろう。また、承久の乱(一二三二年)以降の勲功賞として与える土地が不足し

を行った。先に武蔵国地頭たちに命じた荒野の開発の成果を把握するといふ意図があったものと思われる。武蔵野の開発は、武蔵国統治者として重要な課題の一つであった。北条氏は一二〇七年(承元元)三月二十日に、武蔵国の地頭たちに荒野の開発を命じた。このとき命をうけた西党の平山季重は、秋留橋郷(秋川流



長者堀および長者屋敷推定位置図



旧跡 長者力跡 (『新篇武蔵風土記稿』多摩郡之三十一 拝島領 拝島村)

ていたこともあったであろう。

### ■長者堀の伝承

時房の時代は、山間部の開発も行われていたと思われるが、泰時の時代は、比較的平坦な土地の開発が行われた。泰時の荒野開発は武蔵国全域に及ぶ命令であったから、福生市域でも開発が行われた可能性もある。これに関すると考えられるのが、熊川の長者堀ちやうじやほりにまつわる伝承である。

長者堀というのは、熊川七三三番地あたりの窪地から取水して、拝島駅南口下の長者屋敷とよばれたところまで水を引き入れたといわれる堀のことである。江戸時代後期の一七七三年(安永二)に沢応たくおという人が書

いた『神光仙言夢物語』しんこうせんごんゆめものがたりという物語のなかに「昔、武蔵野に仁智(仁治か)年中に、大野長者といふ福人ありて屋敷回りに堀をほり、当村さる

坂より堀をほり、玉川を引き込み」とある。この文章の仁治年中は三代執権泰時の治世であり、泰時の命で大野氏という人が開発にかかわった

ことを示していると思われる。

長者屋敷(昭島市松原町四丁目、五丁目)からは、「永楽通寶」を

中心とする中国の銭貨六〇枚と中世のものと推定できる壺、そして板碑が出土している。